

## 1996年度アーキテクチュア・オブ・ザ・イヤー顛末記(1996年6月~12月)

—— 田中純手持ち資料から再構成した経緯 ——

### 6.16 趣旨文

### 6.17 韓亜由美さん、三宅理一さんへのメール：コンセプト

建築展とは所詮、〈建築もどき〉でしかない→建築物の表象という行為そのものの〈もどき〉性を自覚=〈展示物〉に依存しない展示の可能性を探ること、自己言及性

→拙稿「利休の暗い部屋」で示したような、カメラ・オブスキュラという〈表象の空間〉を入れ子状に展示空間のなかに作る。その外部は文字(言説)で埋め尽くす(この部屋の外部に文字以外、展示物は存在しない)。内部の真っ暗な空間にはほのかに何らかのイメージが浮かび上がっている。この暗い部屋のなか、あるいはさらに入れ子状になった空間内にインターネットに接続した複数のコンピュータ端末があり、田中をはじめとする複数の著者による新しく書き下ろされた近代・日本・建築論(建築〈共同体〉論)や、今までに書かれたさまざまな著作からの引用文が多様なイメージとともにハイパー・テキスト状態で読めるようにする(このテキストは当然ながら、外部から自由にアクセスできるものとする)。このハイパー・テキストにはもちろん磯崎氏の文章のほか、われわれとの雑談の録音・写真・ビデオ抜粋、磯崎氏の語った時代(60年代など)の音楽(歌謡曲やロック)のコラージュなども、組み込まれる。さらにさまざまな外部のホームへとリンクが張られる。(→ハイパー・テキストの構造についてはいくつかの電子雑誌のホームページが参考となりうる。このページ・デザインを検討)→このハイパー・テキストには展示期間中に観客から随時書き込みが行われ、さらに企画者側もそれに応答していく。展示はこうして常に同時進行しつつ、流動状態にある。

### 7.22 韓さんによる全体構成プラン

第1層：4つの展示、第2層：言説の部屋、第3層：書物の茶室

### 7.25 カタログ構成第1案(この時点で刊行方法未定)

(この間に対談収録)

(この間に軽井沢のトリーハウスおよびアトリエ蔵書第一次調査：田中+学生2名)

### 9.1 蔵書リスト作成スケジュール、カタログ原稿9月末締め切り

### 9.12 「言説の部屋」テキスト選定第1案：対談からの抜粋+α

建築 — それは建築家にとって Love なのか、Belief なのか、Fate なのか?

建築 — それは建築家にとって Father なのか、Mother なのか、Lover なのか?

日本 — それはあなたにとって Love なのか、Belief なのか、Fate なのか?

日本 — それはあなたにとって Father なのか、Mother なのか、Lover なのか?

### 9.13 軽井沢のトリーハウスおよびアトリエ蔵書第二次調査：田中+学生3名

### 9.23 TOTO 出版との交渉開始

### 9.26 TOTO 出版からの書籍刊行内定

→スケジュール：9.30：デザイン(秋山伸さん) + 台割決定、10.14：入稿、11.1：初校

### 10.1 TOTO 出版からの書籍刊行決定：11.20(展覧会初日)刊行

磯崎新監修・田中純編『磯崎新の革命遊戯』(TOTO 出版)

### 11.20-12.3 展覧会

1996年度アーキテクチュア・オブ・ザ・イヤー — カメラ・オブスキュラあるいは革命の建築博物館 —

### 12.1 サロントーク

※展覧会およびサロントークの記録：『10+1』No.8、INAX 出版、1997年、61-78頁。